

## 「場所を受ける」

建築には、場所が必要です。森の中や里山であったり、まちにはビルの隙間にある狭小地や原っぱもあります。もちろん住宅地もあるでしょう。地面を見れば、傾斜地、石だらけの土地、一面の野花、広大な雪原もあります。

あなたは、場所を探すことから始めて下さい。場所を取り巻く環境や地形から様々なことに気づくでしょう。そして、その場所から生まれる新しい住まいを創造してください。

### 計画条件

- ・北海道内の地域と敷地、住戸形式、家族構成等は自由に設定してください。

### 賞 金

- ・最優秀賞 25万円（1点）
- ・優秀賞 5万円（2点）
- ・奨励賞 2万円（4点）

### 締 切

- ・2018年8月7日(火) 持参の場合は16時必着。  
なお、土曜日、日曜日は、受付できません。  
郵送の場合は8月7日消印有効。

### 参加資格

- ・一般、学生等を問いません。
- ・北海道内居住者とします（学生・生徒は北海道内の教育機関に在籍している者に限ります）。
- ・個人参加、グループ参加は自由です。

### 提出物

- (1) 図面  
作品名、設計趣旨及び設計意図を表現する図面（縮尺は自由）。図面には、氏名、記号、サインなどを記入しないでください。A1（841×594）サイズ一枚、横づかい。表現は自由です。ハレパネ又はステレンボード（厚さ5mm程度）などでパネル化してください。
- (2) 返信用ハガキ  
受付番号をお知らせするために使用しますので62円の官製ハガキに応募者の住所、氏名を記入して提出してください。  
（官製ハガキ以外は、受付できません。）
- (3) 応募用紙  
応募作品の「作品名」と応募者の郵便番号、住所、氏名（フリガナ）、所属先名（学生は、学校名・学年）、電話番号をA4版の用紙に記入して（形式は自由）応募作品とともに提出してください。

## 審査委員（委員は五十音順）

委員長 米田 浩志

北海学園大学工学部教授

委員 赤坂 真一郎

㈱アカサカシンイテロウアトリエ代表取締役

委員 小澤 丈夫

北海道大学大学院工学研究院教授

委員 小西 彦仁

ヒココニシアーキテクチャ㈱代表取締役

委員 佐藤 孝

北海道科学大学工学部教授

委員 澤田 貞和

㈱日本工房代表取締役

委員 松田 真人

㈱都市設計研究所代表取締役

## 選考経過

①一次審査（2018年8月22日～24日）

一次審査通過者の受付番号は9月3日(月)に主催者ホームページ（[www.do-kjk.or.jp/](http://www.do-kjk.or.jp/)）で発表します。

②二次審査（2018年9月19日10：30～）

一次審査通過作品からベスト10を選出します。

③最終審査（2018年9月19日13：00～）

二次審査通過作品（ベスト10）から各賞（7作品）を決定します。

最終審査は「公開審査」とし、ANAクラウンプラザホテル札幌23階白樺で行います。

## 入賞者発表

・2018年9月中旬

入賞者に直接通知するとともにホームページでも発表します。

## 入賞作品の展示等

①2018年10月22日(月)～10月26日(金)

大五ビル 6階ホール(札幌市中央区大通西5丁目11)

②2018年11月2日(金)～11月4日(日)

札幌地下街オーロラタウン

・1次審査通過作品は、協会広報誌「ひろば」(12月発行)に掲載します。

また、最優秀賞の方には、同誌への寄稿をお願いしています。

## 入賞者名簿

最優秀賞 押川 快 北海道大学大学院2年  
(共同作品) 秋山 瑞穂 北海道大学大学院2年

優秀賞 野口 翔太 室蘭工業大学大学院1年  
(共同作品) 福山 将斗 室蘭工業大学大学院1年

優秀賞 大久保 修平 室蘭工業大学大学院1年

奨励賞 千葉 大輝 室蘭工業大学大学院1年  
(共同作品) 蝦名 錬 室蘭工業大学4年

奨励賞 小林 賛 室蘭工業大学4年  
(共同作品) 山崎 巧 室蘭工業大学4年

奨励賞 小野 陽平 北海学園大学4年

奨励賞 浅野 樹 室蘭工業大学4年  
(共同作品) 佐藤 由花 室蘭工業大学大学院2年

## 応募作品の著作権等

- ・応募作品の著作権及び著作権は、応募者のものとします。ただし、この事業の趣旨に基づいて、主催者が図書の出版や、新聞、雑誌、その他に掲載又は啓発宣伝などに利用する場合は無償で認めるものとします。
- ・応募作品は原則として返却しません（返却希望の場合は、事務局に相談してください）。

## 主催

(一社)北海道建築士事務所協会

## 後援

北海道

(一財)北海道建築指導センター

(一社)北海道建築士会

(公社)日本建築家協会北海道支部

(一社)日本建築学会北海道支部

㈱北海道建設新聞社

最優秀賞

# 「A HOUSE in/for Three Landscapes」

押川 快 (北海道大学大学院 2年)  
秋山 瑞穂 (北海道大学大学院 2年)

(共同作品)



豊平峡ダムに隣接した大自然の中の敷地である。場所の設定が特徴的な案である。

また、廃棄物ともいえる堆砂に注目し、骨材などに再利用する提案にも拍手。

北海道らしい大自然を相手に、敷地にある3つの風景、自然・人工物（ダム）・湖面をそれぞれ庭園・コンクリート躯体・家具として建築に反映させている。

内部の壁・天井のコンクリートがダムのイメージを十分伝えている。欲を言えば、水の壁があったらよりリアルではないだろうか。

さらに、1階のギャラリーに、ダム湖に接するミニ水族館があったらより楽しさを加えられたのではないだろうか。しかしこの案は、住まいを越えて地域環境と結びついた新しい暮らし方を示唆しているように思える。

そんな想像を膨らませてくれる優れた提案である。

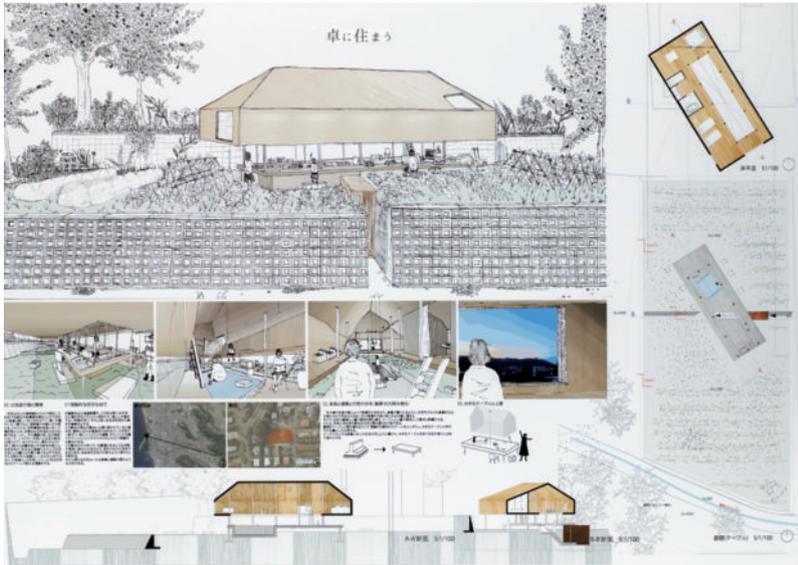
審査委員 澤田 貞和

優秀賞

## 「卓に住まう」

野口 翔太 (室蘭工業大学大学院1年)  
福山 将斗 (室蘭工業大学大学院1年)

(共同作品)



北海道の住宅に見られる「厚い壁と小さい開口」が、環境、場所を受けるものの一つであろうと、作者は述べている。

確かにそのような住宅が大地に並び、北海道の景観をつくっていると思われる。今回設定した場所は、傾斜地をひな壇造成された住宅地である。

この場所に見られるレベルの異なる地面のステージを受けるように小川のレベルから敷地を幾つかのレベルに分けて畑を作っている。建物の基礎とスラブをオープンキッチン・カウンターに見立てた生活の場が、畑の食材に囲まれて大地に広がり、住居はその上に「厚い壁と小さい開口」の塊として浮いた。場所を捉えた建築が新しいライフスタイル生み出している。

優れた作品である。

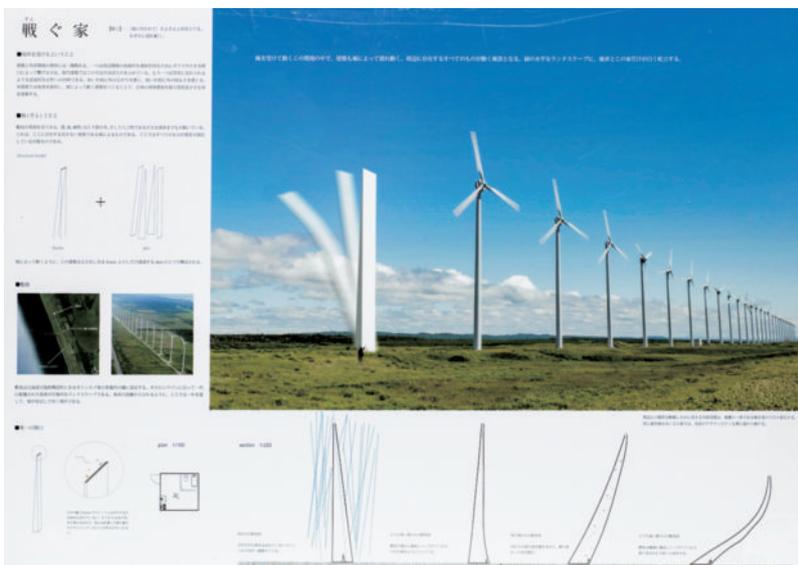
審査委員 佐藤 孝

優秀賞

## そよ 「戦ぐ家」

大久保 修 平

室蘭工業大学大学院1年



素直に課題と向き合った清々しい作品です。

道北の特徴的風景のひとつである風力発電用の風車に並び、この建築がそよぐ姿は美しく、審査員を惹きつけました。

最も興味深かったのは、頂部にある僅かな開口を通じて降りてくる光や雨の状態です。それは建物の動きと連動して、内部空間に思いがけない現象を引き起こし、住まう人に劇的な体験を提供するでしょう。

この作品の特徴である「動く」建築の構造や素材について何らかの表現があると、前述の要素と相まって、提案を見る人に更に魅力あるシーンを想像させ得たのではないのでしょうか。

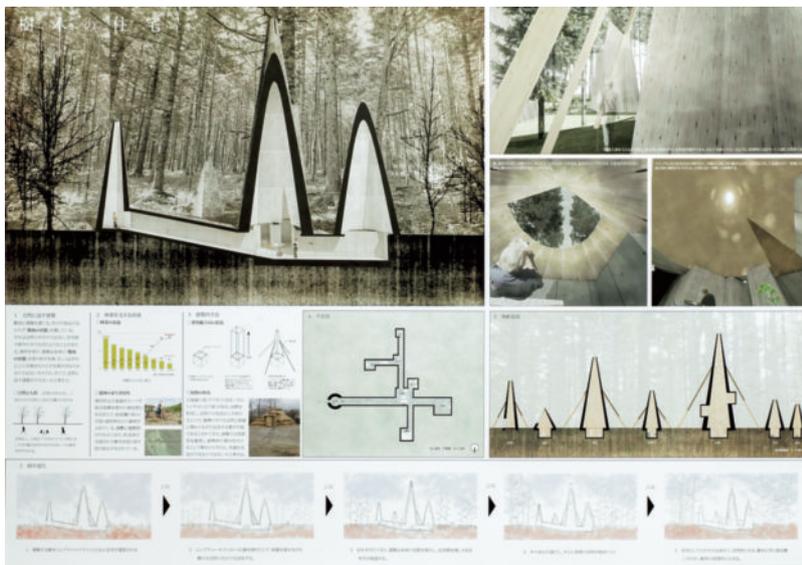
審査委員 赤坂真一郎

奨励賞

## 「樹木の住宅」

千葉 大輝 (室蘭工業大学大学院 1年)  
蝦名 鍊 (室蘭工業大学 4年)

(共同作品)



都市の中でも、自然の中でも、建築することは即ち、敷地の状態を壊しており、この作者は「場所を受ける」とは、本来の敷地の状態を取り戻す事であり、建築することによってこれを実現したいと考え、樹木の住宅を提案している。森の中での植林とともに家を建て、子育てを終わった夫婦が住み、その生涯を終えるとともに、その役割を終えた建築が徐々に朽ちて自然と一体化していくというストーリーである。

人間も自然の一部であることをより鮮明に浮かび上がらせてくれる建築で、詩的な哲学的な心地よいあり方を提案している。根としての地下の居室群と、枝葉としての吹き抜けポイド空間がユニークな住空間を作り上げている。

一方で、地下の空間が幾何学的なプランで、樹木の根の配置を損なうのではないかと、もっと有機的な形でよかったのではないかと。あるいは上部の架構が、骨組にベニヤのようなものを貼っている様に見える、杢材をくり抜くような形でも良かったのではないかと。登り梁がやや不明解との指摘があったことを付け加えておきます。

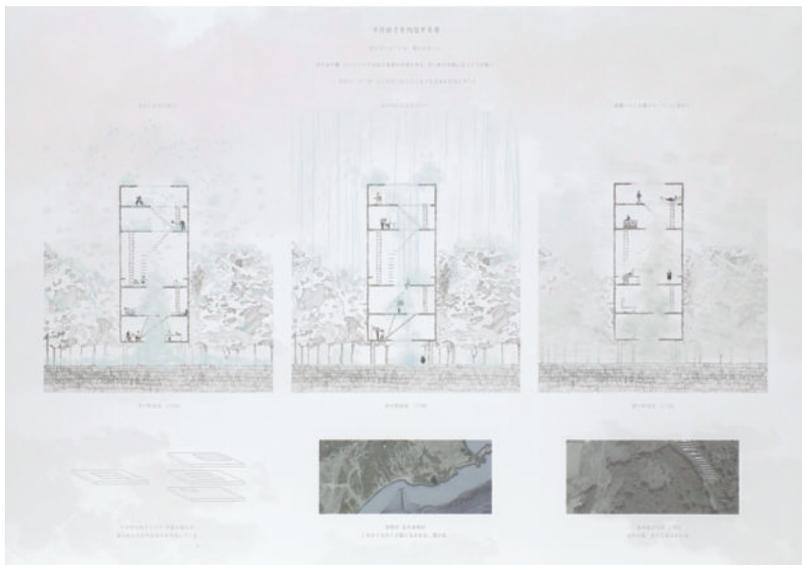
審査委員 松田 真人

奨励賞

## 「不自由を内包する家」

小林 賛 (室蘭工業大学 4年)  
山崎 巧 (室蘭工業大学 4年)

(共同作品)



一年の3分の1を霧に包まれる釧路市昆布地区に計画された案である。

森の中に地上より3mほど浮かせ周辺の樹木の中に長方体の箱を縦においている。あえて閉ざされた外周部は森を見せることなく、その長方体の上部に穴を開け、さらに各階のスラブにも穴を開け全てが空気の通る状態である。

その縦穴より雪、雨そして霧が空間内に入り込む、各階に空けられたスラブの穴が少しずつズレ、そのズレにより雪はスラブにのり壁をつくり、雨は跳ねそして滴り心地よい雨音を発する、また霧は室内を雲中と化する。

天からの自然と共に暮らすための素敵な空間である。その一方で開口部は全て解放され生活のリアリティにかけているところが残念である。

この一点が上位入賞を阻んだ。

審査委員 小西 彦仁

奨励賞

## 「Coexist～軟石に寄生する家～」

小野 陽平

北海学園大学 4年



札幌市藻南公園内、札幌軟石採掘所跡地における設計案である。本年度の課題「場所を受ける」に、力強くストレートに応えた優れた提案といえよう。

かつての採掘によって露出した崖面を、大胆にくり抜くことによって、店舗・アトリエをもつ三世帯住宅とし、さらに棚やテーブルなど家具を軟石でつくりこみ空間と一体化している。これによって、作者は「場所と建築が拒絶しあっている」現状に意義を唱え、すでに我々の日常の記憶から消えつつある旧採掘所へのこのような住空間の挿入が、「枯れた花の種子にもう一度水をあげる」こと、つまり、「場所」に再び生气と潤いをもたらすことになると主張する。

この提案が喚起させるのは、よく知られる大谷石地下採掘場跡(現大谷資料館、宇都宮市)である。石塊を大胆にくり抜いてできる圧倒的な非日常的空間は、多くの訪問者を強く魅了する。本提案にも、このような「場所」と空間との非日常的な関係が魅力的に表現されている。

一方で、平面構成が、汎用的な住戸プランを踏襲しているように見えることが気になった。空間の繋がり、間仕切りや建具などに、この提案ならではの独自展開の余地があったのではないかと思われた。

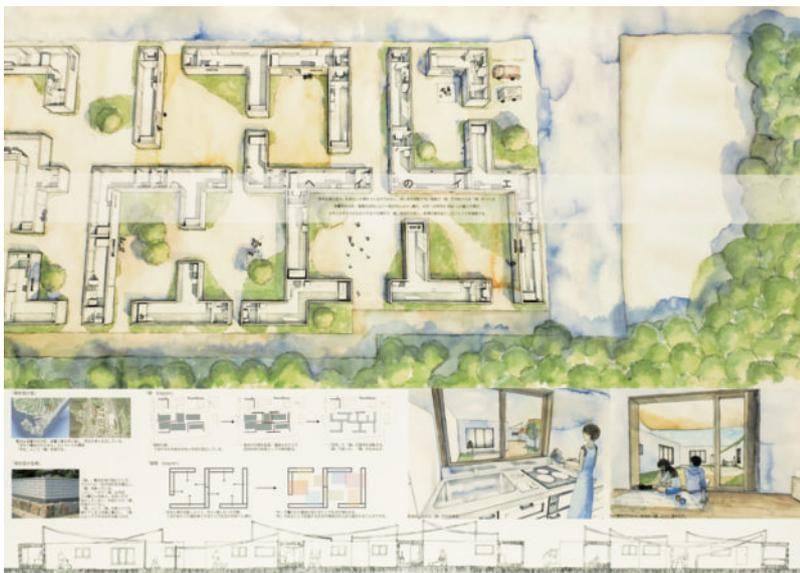
審査委員 小澤 丈夫

奨励賞

## 「ヘイのイエ」

浅野 樹 (室蘭工業大学 4年)  
佐藤 由花 (室蘭工業大学大学院 2年)

(共同作品)



多くの学生が暮らす地域に、「住宅」と「塀」との関係を逆転させた住まいを展開し、生活が滲み出る複数の広場を生み出し、それらを繋げ、新たな街のあり方を提案しようとする意欲的作品です。

CADやCGによるプレゼンが主流の中、水彩風の手書きドローイングも目を引きました。しかし、アイデアの出処が「塀」であるが故に、全ての床が地表レベルで展開されていたり、建物幅が全て同じになっていたり、自分のルールに縛られて、提案を発展させるチャンスを逃してしまった感もありました。

このルール設定をほんの少し変えるだけで、より魅力的な作品にすることが出来たのではないのでしょうか。

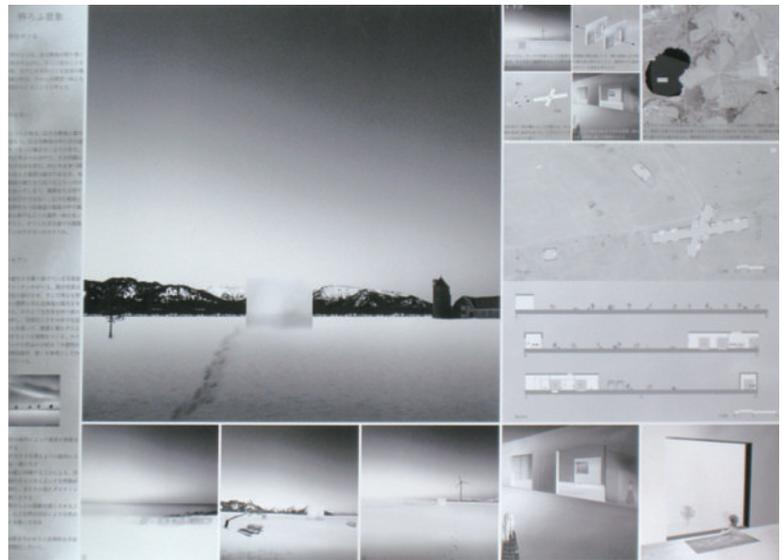
審査委員 赤坂真一郎

板東千尋

北海学園大学 4年



杉田 涉伍 (北海道科学大学大学院 2年)  
若原 大介 (北海道科学大学大学院 2年)  
(共同作品)



羽田 崇 人

北海道大学大学院 2年



# 1次審査通過作品

佐々木 のぞみ

札幌市立大学 3年



中西 慶侑 (北海道科学大学大学院 2年)  
吉川 明香 (北海道科学大学 1年)

(共同作品)



谷浦 脩斗 (吉本考臣建築設計事務所)  
岩木 智穂 (合資会社 d.n.a.)

(共同作品)



蝦名 鍊 (室蘭工業大学 4年)  
浅井 敬太 (室蘭工業大学 4年)

(共同作品)



表彰式

## 総 評

住宅は、場所と共に生きる生活環境である。したがって、場所の特性を読み解きながら、住宅のプログラムや住宅の形式を追求する必要がある。もちろん、場所だけに目的性を有しているのではなく、設計者の理念の定位や住生活の機能性を優先させることもあり得る。しかし、実体としての住宅には、場所との間に呼応関係を導き出さなければならない。住宅を縦糸（垂直的なるもの）、場所を横糸（水平的なるもの）に例えると、丹念に編み出される織物のような関係と言い換えることができる。今年、第43回目を迎える北の住まい住宅設計コンペ、別称キタスマコンペの課題は、「場所を受ける」であった。住宅と場所の関係を言葉にすれば「場所に（住宅をつくる）方が一般的かもしれない。しかし、今回の課題をあえて「場所を受ける」にしたのは、場所を生活環境の主体として提示するためであった。なぜならば、場所には実体としての特性にとどまらず、地域や風土への拡がりが含まれているからである。結果として、北海道の風土にふさわしい住宅の提案が期待された。

第43回北の住まい住宅設計コンペの締切日は8月7日であった。応募総数33作品が集まった。残念ながら例年と比較すると少なめの応募数であった。今年は課題の公開日程が例年よりも遅く、各関係部署に周知するタイミングが遅くなったことが減少の原因であった。コンペにおいてはスケジュール上の各タイミングも重要であることを再認識させられた。その後、一次審査は、8月22日から24日の3日間で行われた。各審査委員が7票を持ち、投票を行った。結果、一票以上が投票された14作品が一次審査通過作品として残った。二次審査会は、9月19日午前中に開催された。この審査会では改めて各作品に対し評価の議論を重ねながら投票を行った。この段階でベスト10入賞作品が決まった。同日午後には、一般公開を前提とした最終審査会が開催された。ここまで残ったベスト10入賞作品を前提に、さらに議論を重ねながら、7作品を選出した。その後投票を繰り返し、最優秀賞作品1点、優秀賞作品2点、奨励賞作品4点を決定した。今年は、最優秀賞作品が決選投票によって選出することになったのが大きな特徴であった。

最優秀賞作品（押川・秋山案）は、課題に対して最も的確に応えた作品だった。定山溪ダムを管理する住まいにおいて、周囲の風景や素材そして形態の関係を顕在化させたプロセスは、場所への眼差しから生み出されたものとして高く評価できる。優秀賞作品（野口・福山案）は、住空間の質に創造的リアリティがあった。家具の機能に限定されないテーブルを配置した一階部分の空間秩序は秀逸であった。しかし、主体である場所にあまり特徴がなかったのが悔やまれる。もう一つの優秀賞作品（大久保案）は、上位2作品とは異なったアプローチをとりながらも、強い印象を残した作品であった。風力発電に着目しながら、住宅と風との関係を解いていた。動く形態は、新たな住形式の可能性を提示していた。そして、奨励賞作品4点もそれぞれ特徴的な作品であった。さらに作品としての質を高めることができたなら上位入賞もあり得たであろう。

今年のコンペは、応募総数は少なかったものの、一次審査通過作品以降に残った作品は、例年と比べ、決して見劣りすることのない質の高い内容のものばかりであった。どの作品も、具体的な場所を「発見」しながら住宅の形式に変換されていた。場所という言葉の意味に限定されない、広範囲な視点、そして様々な与条件が統合されていたともいえる。このようなスタンスからは、北海道の住宅にあるべき姿が自然と生み出されていた。今回も、北の住まいの可能性が喚起させられる有意義な審査の『場』であった。

審査委員長 米田 浩志

# コンペ最優秀賞に受賞して

第43回北の住まい住宅設計コンペ最優秀賞受賞者

押川 快（北海道大学大学院2年）

秋山 瑞穂（北海道大学大学院2年）

（共同作品）

第43回の北の住まい住宅設計コンペ最優秀賞に選んでいただきまして、ありがとうございます。「課題を解釈すること」「話し合うこと」というふたつの切り口から、作品制作の経緯と受賞にあたっての感想を書きたいと思えます。

## 課題を解釈すること

「A HOUSE in/for Three Landscapes」という作品タイトルは、コンペのポスター（Fig.1）に描かれていた線と球からなるビジュアルイメージから着想を得ています。9本の黒い線と、その上に浮かぶ、小さいけれども存在感のある赤い球。コンペのポスターには、課題である「場所を受ける」というフレーズの上に、そのようなイメージが描かれていました。私たちは、この線と球は場所と建築の理想的な関係をあらわしているように思いました。1本ではなく9本の線が描かれているように、場所を複層的で重層的なものとして捉えること。そして、描かれた線と球のあいだに生じている目に見えない力（線と球のあいだには、まるで次の瞬間にも動きだしそうな緊張感が感じられます）のように、建築と場所が互いに影響を与えあうこと。このふたつが、私たちが作品を考える上での大きなテーマとなりました。

敷地はこのふたつのテーマに沿うような、複数のそれぞれ性質の異なる要素が併存した場所として、豊平峡ダムに目と鼻の先まで迫ったところを選びました。人に左右されない巨大な「自然」と、その自然の力を人の力で制御しようとする「ダム」、そしてその狭間に生じる「堆砂」（ダムの上流から流れ込み、ダム湖の底に溜まった土砂）という、3つの風景が併存している場所です。圧倒的なスケールを持つ人工物である堤体の向こう側には、さまざまな動植物が生息するダム湖が広がっています。秋には紅葉を求めてたくさんの観光客がこの地を訪れ、冬には表面の凍った湖の上に真っ白な雪が降り積もります。このように、眼を向ける方向や、時間帯・季節によって、顕在化する場所の特徴が大きく変わる場所だと感じました。

そこで、これらの3つの風景が持つ魅力を生活に取り込むと同時に、3つの風景に対して新たな価値を与えることのできる建築を目指しました（Fig.2-5）。

## 話し合うこと

制作のプロセスのなかでは、ふたりで話し合うことが重要な役割を持っていました。話し合いの中での共鳴や衝突から、自分ひとりでは思いつかないアイデアが出てきます。それぞれが異なる切り口から考えることで、大胆な思考の飛躍が起り、デザインの厚みが増していきます。

さらに、公開の最終審査会では、自分たちでは言語化できていなかった作品の魅力や、思ってもみなかったアイデアの発展可能性について、多くの講評をいただくことができました。まだまだ勉強不足であることを痛感しつつも、さらなる発展可能性へ期待をいただいたことを、とてもうれしく思っています。話し合うことは、建築を考えるために欠かせないプロセスであることを改めて実感しました。

今回の作品制作・審査で発見することのできたことがらを糧に、今後も思考と制作を展開していきたいと思えます。

第43回 北の住まい住宅設計コンペ最優秀賞受賞作品「A HOUSE in/for Three Landscapes」

